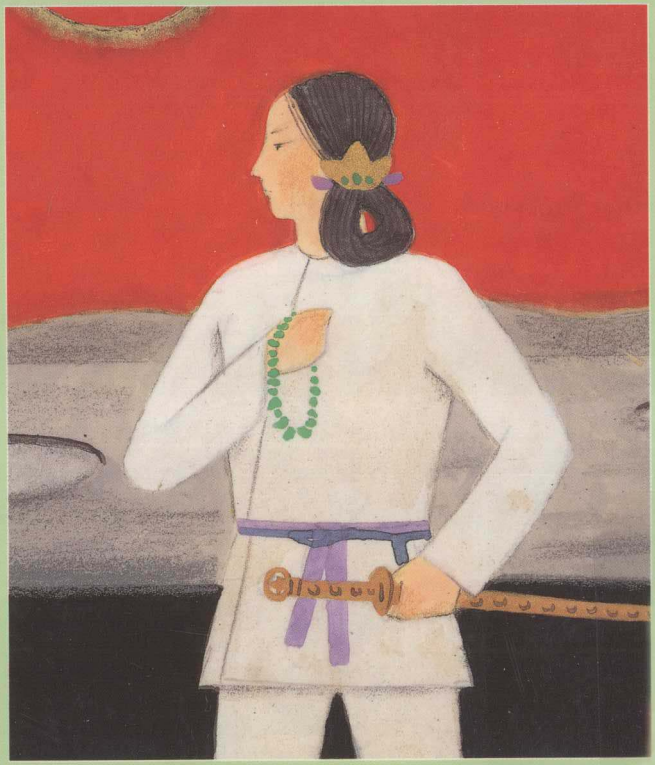
聖徳太子 2

◆日と影の王子

黒岩重吾

文春文庫



文春文庫

聖徳太子 日と影の王子 2

定価はカバーに表示してあります

1990年4月10日　第1刷

著　者　黒岩重吾
発行者　豊田健次
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-718224-6

文春文庫

聖德太子

日本の王子

黒岩重吾

文藝春秋

江苏工业学院图书馆
藏书章

目次

別離　9
陽光の季節　223

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

〈主要登場人物〉

厩戸皇子（聖徳太子）　橘豊日大王（三十一代用明天皇）と穴穂部間人皇女との間に生まれた聡明な皇子

穴穂部間人皇女　厩戸皇子の母。のち田目皇子と再婚する

蘇我馬子　大臣。蘇我稲目の子

刀自古郎女　蘇我馬子の娘。厩戸皇子と結婚する

秦河勝　山背の豪族。厩戸皇子の舎人の長

迹見赤檮　倭国一の武人。秦河勝の後を継いで厩戸皇子の舎人の長となる

豊御食炊屋姫（額田部皇女）　渟中倉太珠敷大王（三十代敏達天皇）の皇后。後の三十三代推古天皇

菟道貝鮹皇女　豊御食炊屋姫の娘。厩戸皇子の正妃となる

泊瀬部皇子　穴穂部間人皇女の弟。のちに即位して泊瀬部大王（三十二代崇峻天皇）となる

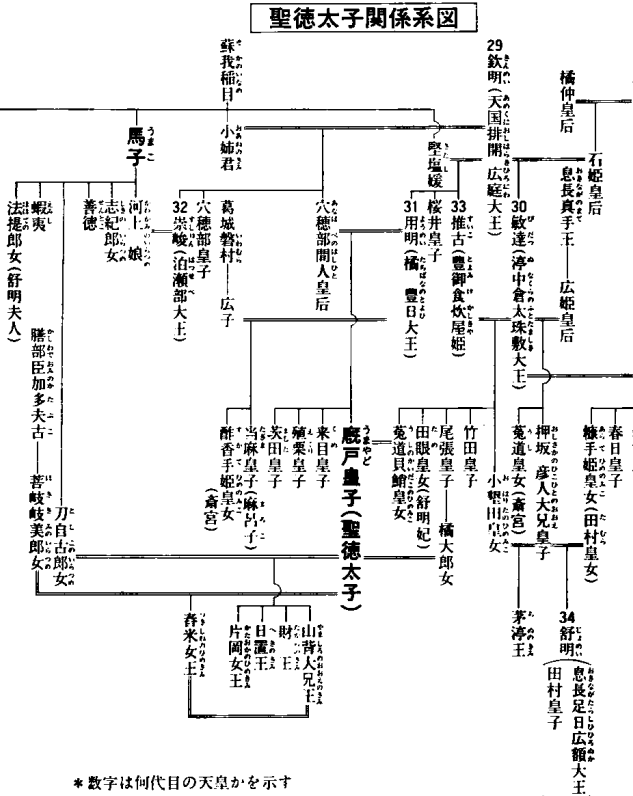
東漢直駒　蘇我馬子の警護隊長

竹田皇子　豊御食炊屋姫の病弱の皇子。菟道貝鮹皇女の兄

恵便　高句麗僧。厩戸皇子と蘇我馬子の師

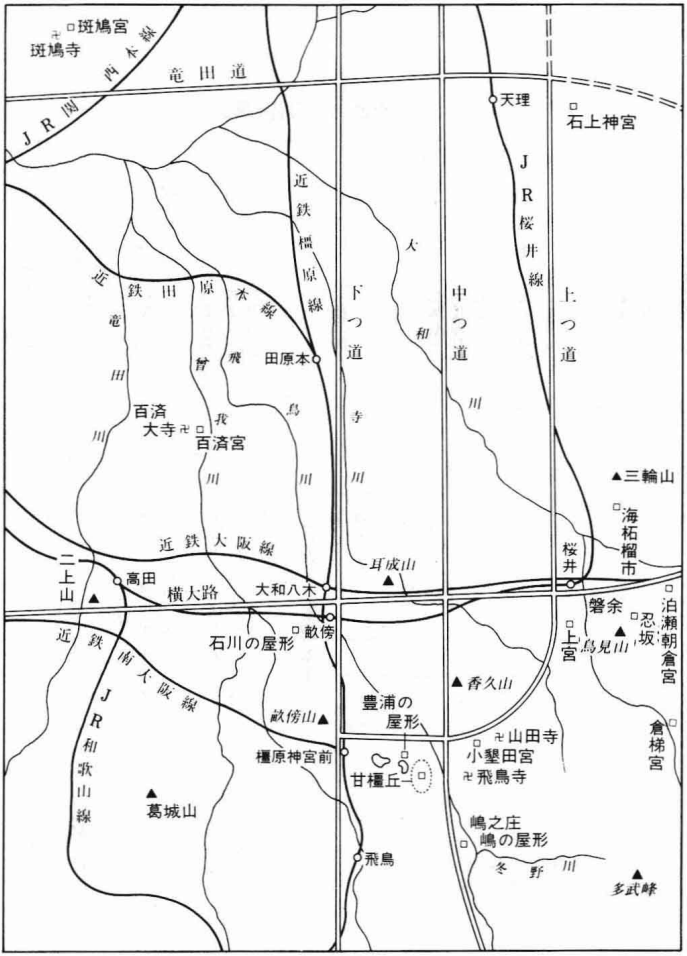
慧慈　高句麗僧。恵便の後を継ぎ、厩戸皇子の師となる

聖徳太子関係系図



＊数字は何代目の天皇かを示す

＊═══は婚姻関係


斑鳩宮
斑鳩寺
JR関西本線
竜田道
天理
石上神宮
JR桜井線
近鉄橿原線
大和川
下つ道
中つ道
上つ道
近鉄田原本線
竜田川
曽我川
田原本
百済大寺
百済宮
鳥寺川
三輪山
海柘榴市
近鉄大阪線
桜井
二上山
高田
横大路
大和八木
耳成山
磐余
泊瀬朝倉宮
忍坂
上宮
鳥見山
石川の屋形
畝傍
近鉄南大阪線
JR和歌山線
畝傍山
香久山
豊浦の屋形
山田寺
小墾田宮
飛鳥寺
倉梯宮
橿原神宮前
甘橿丘
葛城山
嶋之庄
嶋の屋形
飛鳥
冬野川
多武峰

聖徳太子——日と影の王子　二

別　離

刀自古郎女に仕える女人が馬子が来たことを廐戸に伝えたのは、廐戸が雪景色を眺めていた時だった。雪はもうほとんど止んでいた。

庭樹も茅葺きの屋根も雪に覆われ、小川の流れが黒く光って見えた。

廐戸は雪用の皮履をはき、刀自古郎女と共に、女人達を従え、馬子が待っている屋形に行った。石川の屋形は広い。南門を入った正面の屋形は政治の場で、その後ろに馬子専用の屋形がある。菅の茎や葉で作った雪除けの蓑を被た東漢氏の兵士達が数人馬子の屋形を守っていた。馬子の警護隊である。

隊長は東漢直駒で、階段の下に槍の柄を積った雪に突き刺し、傲然と立っていた。

兵士達は、廐戸の姿を見ると雪の上に蹲ったが、駒だけはなかなか蹲らない。

吾の主君は大臣だけだ、と駒はうそぶいているようだった。駒を睨んでいた刀自古郎女が廐戸の前に出ようとしたので、廐戸は放っておけ、と手で制した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

廐戸との距離が十歩ほどに迫った時、駒は槍を握りながら蹲った。
屋形の縁に通じる階段の雪は綺麗に取り除かれていた。廐戸が駒の傍を通ると、駒は蹲ったまま顔を上げた。
「皇子、大臣はお待ちになっておられます」
「ああ、それで参った」
駒の口調は、まるで馬子を大王と考えているようだった。廐戸よりも、馬子の方が位が高いという信念が声に表われている。
「大臣、廐戸皇子が参られました」
駒は大声で告げた。
屋形の戸が開き、厚い絹綿の上衣を着た馬子が正面の板縁に姿を現わした。
廐戸と視線が合うと、馬子の方から頭を下げた。廐戸は下から挨拶を返した。廐戸が階段を上がると、馬子は腰をかがめた。
「皇子、お入り下さい」
「出迎え、御苦労です」
暖を取るために明り取りの窓は小さい。薄暗い部屋を魚油の明りが照らしている。
廐戸は部屋の奥に敷かれた毛皮の上に坐った。刀自古郎女は下座の席だ。馬子は板壁を背にし、二人の中央に腰を下ろした。この屋形は渡り廊下で膳部屋に通じている。
馬子が金銅の鈴を鳴らすと、二人の若い女人が酒壺と酒杯を運んで来た。

冬、暖を取るのは酒が一番である。
「皇子、母上はお元気かな」
「少し風邪気味ですが、たいしたことはない」
刀自古郎女の手前、厩戸は嘘をついた。
女人は、三人の前に酒杯を置いた。まず厩戸の酒杯に酒を注ぎ、次に馬子、最後が刀自古郎女である。
「さあ、身体を暖めよう、皇子が上宮の方なら、宮に参るつもりでした、こちらだと聴いて、参ったわけです」
「父上、皇子に特別なお話しでも」
「いや、刀自古もいてよい」
胡座をかいた馬子は瑠璃の酒杯の酒を喉を鳴らしながら飲む。かなり熱い酒だが平気なようだ。厩戸は釣られて飲もうとしたが、あまりの熱さに顔をしかめた。
刀自古郎女が熱い、と叫んだ。
馬子が大笑し、一息に飲まなければ、身体は暖まらぬ、という。
「皇子、竹田皇子が風邪を引かれ、床に伏されていることは、もう皇子のお耳に入られたかな」
熱くなった瑠璃の酒杯を両手で包むように持ち、口に運ぼうとした厩戸は、思わず馬子の顔を見た。馬子の茫洋とした表情からは何も窺えなかった。

「いや、吾は耳にしておらぬ」

「上宮と飛鳥は離れておる、それに吾も昨日知ったところです、豊浦の大后から、良い医者を求める使者があった、かなり熱が出ているようじゃ、見舞に行かねばなるまい、といって、あまり大勢で参ると皇子の病にさわる、田目皇子と摩理勢には吾の方から使者を出した、ここからは、皇子と吾と、刀自古の三人が参ればよい」

「かなりお悪いのですか？」

「勝気な大后も、かなり心配しておられる、大后にとって竹田皇子は最も大切な皇子です、来年は二十一歳だが、まだ大后に甘えているようなところがある、大后にとっては、そういう皇子が可愛くて仕方がないのです、これから見舞に参れば、どの程度か分るでしょう、身体が暖まったら参りましょう」

馬子は豊御食炊屋姫だけは大后というのだ。

廐戸は、葛城山の上に立ち、ぼんやりと遠くの海、島、空でも眺めているような馬子の表情が気になった。こういう時の馬子の腹の中は聡明な廐戸にも見当がつかない。

刀自古郎女の姉である志紀郎女は竹田の妃になっている。馬子にとって竹田は廐戸と共に蘇我氏を支える皇子だった。

廐戸は嶋の屋形や石川の屋形で行なわれる酒宴の席で、竹田と顔を合わせているが、豊浦の大后と呼ばれる豊御食炊屋姫とは、この正月以来、会っていなかった。

豊御食炊屋姫は、廐戸の母に好意を抱いていない。そのことを知っているので、廐戸も自然

豊御食炊屋姫を避けるようになっていた。それに豊御食炊屋姫は廐戸の母とは異なり大柄で、顔も大きく、よく太り何となく威圧感を覚えてならない。

廐戸は見舞に行きたくなかったが、断る理由はなかった。ただ馬子が見舞に行く以上、かなり風邪がこじれ重態なのだろう。

気が付くと馬子が意味ありげな眼を廐戸に向けていた。

「皇子、そろそろ参りましょうか、まだ雪は止んでいないし、馬では無理じゃ、輿に乗って参りましょう」

雪は確かに降っているが、今にも止みそうだった。

「皇子、豊浦までは一里近くありますぞ、馬に乗って雪に打たれ、風邪を引かれては大変です」

と馬子は断乎とした口調でいった。

馬子が風邪を心配したのも無理はなかった。笠を被ったとしても馬に乗れば、どうしても雪を浴びてしまう。その点輿だと、雨除けの覆いがあるので、濡れなくても済む。

輿といっても当時の輿は完全な屋形ではない。板の上に覆いをつけているだけの簡単なものである。大王の場合は薄い絹布で輿を包み、外からは窺えないようになっているが、普通は大臣でも、上の覆いだけだった。

馬子が揃えた輿を見て廐戸は驚いた。絹布が垂れ、中が見えない。

絹の色は紫、薄紫、それに紅だった。

「皇子、百済の使者から聞いて、吾が屋形工に造らせた輿ですぞ、皇子は真中の紫色の輿にお乗り下さい、刀自古は紅の方だ」

輿の周囲には輿をかつく隼人達が雪の上に蹲っていた。

「皇子、早く乗りましょう」

刀自古郎女は嬉しそうにいうと紅の輿に乗った。廐戸は雪用の皮履の代りに鳥皮の履をはいた。

輿には毛皮が敷かれており、身体の安定を保てるように綱がぶら下かっていた。

廐戸もこんな便利で豪華な輿に乗るのは初めてたった。

「大臣、吾の舎人達に伝えていただきたい」

廐戸は輿に乗る前にいった。

「皇子、御心配なく、先刻伝えたので、南門の外で皇子をお待ちしている」

馬子は鷹揚な口調で答えると先頭の薄紫の輿に乗った。恵便か、色の中では紫色が最高位の色だと教えて以来、馬子は紫色を好むようになった。

廐戸は輿に乗ると、鳥皮の履を脱ぎ胡座をかいた。敷いてあった毛皮の先をめくり、膝に掛けると結構暖かい。

「皇子、綱をお取り下さい、輿を持ち上げます」

太い声は駒である。隼人達は廐戸にしかに話さない。

綱があるので乗り心地は悪くなかった。

馬子は、これまでの倭国の風習を破り、便利で贅沢なものを次々と作って行く。

庭の築山の上に酒宴用の屋形を建て、庭に大きな池を掘り、人工の小川を流す。馬子は海外の文化を取り入れ、倭国に文化の花を咲かそうとしている。その象徴が飛鳥の大寺である。

厩戸は南門を出たあたりで、絹布を持ち上げた。馬の手綱を取った風鳴や石根達が蹲っている。先頭を行く馬子の前後を東漢氏の兵士達が守っていた。

「風鳴、石根、吾の馬は？」

「皇子が輿に乗られるという知らせがありましたので、馬小屋に繋いであります」

「雪が止めば、帰りは馬に乗るかもしれぬ、我等の一行に加えてやれ」

舎人達は笠を被り蓑を被ていた。

「はっ、引いて参ります」

「まてまて、蓑を被せるのだぞ、馬だって風邪を引く」

と厩戸はいった。

数十人の警護の兵士に守られた一行は、石川から甘橿丘に向った。豊浦は甘橿丘と西の丘陵にはさまれた狭い場所だが、北方は飛鳥川沿いに平野が拡がっている。飛鳥川は甘橿丘の北方で西方に大きく湾曲していた。水利の便もよく、三方を丘陵で囲まれているので、地の利を得ている。

馬子の子の蝦夷と孫の入鹿が甘橿丘を要塞として、後年屋形を建てたのは有名である。豊浦は豊かな浦という意味を持つが、馬子の父稲目の頃は向原とも呼ばれていた。これは飛鳥川の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton